



Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	佐賀県北茂安町の共同風呂について(Community Public Bath in Kita-Shigeyasu Town, Saga Pref.)
著者 Author(s)	野口, 智宏 / 白石, 太良
掲載誌・巻号・ページ Citation	兵庫地理,44:49-56
刊行日 Issue date	1999-03-31
資源タイプ Resource Type	Journal Article / 学術雑誌論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90002422

Create Date: 2017-12-18



佐賀県北茂安町の共同風呂について

野口 智宏・白石 太良

1. はじめに

共同風呂とは、一つの集落または地区を単位とし、または何軒かの家が仲間を組織して共同の浴場を設け、交代制などにより風呂焚きすることによって毎日入浴した風呂のことである。形態的には銭湯に類似するが、限られた地域住民の入浴である、入浴料を取らない、湯沸かしの当番制、などの相違点がみられる。また、用水や燃料が必要なことから、温泉地に多い共同浴場とも異なっている。

このような共同風呂は、明治期から昭和40年代ごろまで、ところによっては現在においてもみられ、日本近代の庶民文化の一端を示す事象であった。しかも、仲間の形成による地域社会との関係はもとより、運営と管理における経済的側面からも注目されるものであった。とはいえ、その実態は十分に解明されておらず、わずかに静岡県の浜名湖周辺（小杉1981）、愛知県の豊橋周辺（愛知大学1996）、鳥取県の倉吉付近（白石1997a）、福岡県西部から

佐賀県東部（白石1997b）などについて概括的に知られるにとどまっている。ほかにいくつかの地域において市町村史（誌）に記載され（白石1998）、また筆者らは富山県朝日町や岐阜県多治見市、愛媛県宇和島市、長崎県佐世保市などにおいても存在したことを確認しているが、それらの状況は詳細にはわかっていない。

その意味から本稿は、すでに広範囲に共同風呂の存在が確認されている北部九州地域のなかから佐賀県三養基郡北茂安町を選び、事例調査の結果を報告するものである。

北茂安町を事例地域としたのは、ここが北九州地方における共同風呂分布範囲のなかで中心的位置を占めていること、平野部にあって燃料や用水の確保など共同風呂の成立要件が分かりやすいことなどによる。調査は、共同風呂が記録に残りにくい事象であることもあって、主に聞き取りによって行った。

2. 北部九州の共同風呂

北部九州にはかつて広い範囲にわたって共同風呂が存在していたので（第1図）、北茂安町の周辺地域の共同風呂の状況について、市町村史（誌）から概観しておこう。

福岡県では北は鞍手町から南は立花町まで、佐賀県においては北は呼子町から南は有明町まで、広く共同風呂の存在が認められている。特に、久留米市を中心とした筑紫平野一帯には集中して分布する。

共同風呂の成立時期については、福岡県朝倉郡杷木町で



第1図 福岡県と佐賀県の共同風呂の分布
（確認されたもの・市町村単位）

は明治17年ごろとされ、同八女郡黒木町では明治以前から点在していたというが、市町村史(誌)には明確な記述はなく、多くは漠然と明治頃とのみあげられている。その契機については、久留米市で燃料が薪から石炭に移行するに及び、住民の要求と行政の指導とが合いまって普及したとあることが注目される。

終了時期は相違が大きく、大正期にはすでに廃止されていた地域や昭和初期になくなった地域がある一方で、現在もなお継続するところもある。太宰府市では、大正中期から五右衛門風呂の普及が始まって内風呂が次第に多くなり、昭和10年ごろを境に共同風呂は姿を消していったという。福岡県粕屋郡久山町では昭和30年代から40年代にかけて消滅したが、新築ブーム、灯油・ガスなどの燃料革命、自家用電動ポンプの普及などにみられる生活の変化、衛生思想の進展などが原因であるといわれる。共同風呂が衰退する要因は様々で、経済成長による生活水準の向上を背景としつつ、上水道の普及やボイラーなどの湯沸かし手段の発達などにより、庶民の生活の有り様が変わったためと考えられる。

共同風呂に対する実際の呼称は、地域によって様々であったが、福岡県では久留米以北はモヤイ風呂、以南はモエ風呂という場合が多い。佐賀県では一般にモヤア風呂(モヤー風呂)といった。いずれも、共同風呂が地域社会における共同体的助け合いとして営まれたことを示している。

風呂の建物は、概ねどの地域においても湯槽を屋根で覆うだけの質素なものであった。例えば三田川町では、地下(チゲ)¹⁾の家々が5~10戸で申し合わせ、板囲いに萱や藁で葺いた小屋を建てて風呂小屋とした。

運営方法は、地域によって若干の相違があるものの、燃料の当番持ちによる輪番制が多かった。もちろん、燃料の共同購入や風呂沸かしを雇うところもあった。必要経費は大半が家族人員による均等割で毎月支払う形式で

あったが、入浴は無料で修繕費用のみを負担する場合もみられた。久留米市高良地区では、共同風呂の権利を持つ株主と一般家族とがあり、前者は1日交代で当番に当たって費用を月ごとに収め、後者は利用する度ごとに入浴料を支払った。

その他、当番には当番札を回す、湯が沸くと拍子木で知らせる、正月や祭りには朝風呂を立てるなどの慣習もあった。

共同風呂は、現在からみれば衛生面や風紀上の問題がなかったわけではないが、存続した当時は地域住民にとってはコミュニケーションの場と捉えられていたようである。いずれの市町村史(誌)にも、共同風呂を懐かしみ、好ましい人間関係を生み出した場所という記述が多い。

3. 北茂安町の共同風呂の分布

1) 事例地域の概観

北茂安町は、南に筑後川が流れ、北は脊振山を臨む筑紫平野の中心部にあり、福岡県との県境に位置する佐賀県東部の町である。町域東端には九州五社八幡の一つで旧国幣小社の千栗八幡宮があり、往年は門前町としても栄えた。行政区域としては、明治22年に近隣4ヵ村の合併により北茂安村が誕生、昭和40年に町制を施行している。

町内を東西に旧長崎街道が走り、今は国道34号が通って福岡と長崎を結ぶ交通の要衝である。主産業は米作りを中心とする農業で、30~40戸程度の集落が分散的に分布している。しかし現在では、久留米市のベッドタウン的存在の町として新興住宅地の建設も盛んで、人口も、昭和35年の8,471人から平成7年には11,610人へと増加した。

2) 共同風呂の存続期間

北茂安町では共同風呂を一般にモヤア風呂というが、その成立の背景や存続した期間に関する資料はみられない。古老からの聞き取

落規模や浴場の大小によりその数は1～5カ所と相違するものの、全住民の入浴が可能な環境が整備されていたといえることができる。このことは、集落ごとの生業等の相違とは関係なく共同風呂が用いられ、住民の日常生活行為の一部に入浴が関わっていたことを示している。

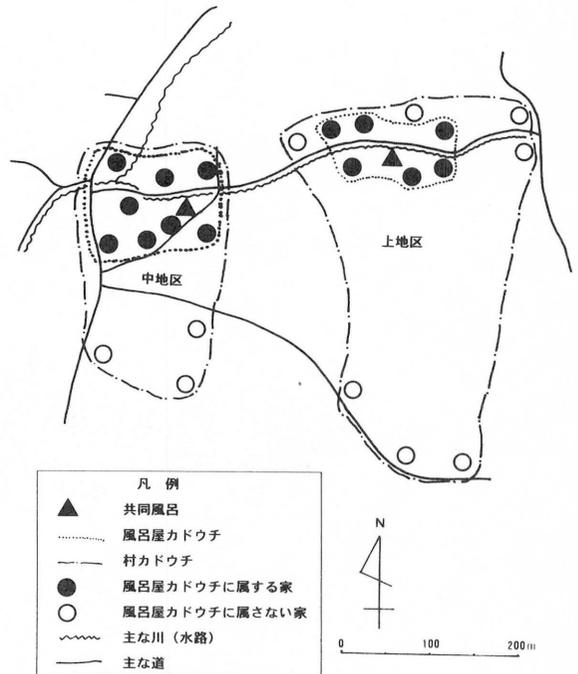
共同風呂の位置は、いずれも家並みから10～20メートルあまり離れた場所で、町の中心を流れる寒水川のほとりをはじめ付近の水路沿いであった。用水の確保と排水の利便さのためにここが選ばれたようである。

4) 風呂屋カドウチ

共同風呂はそれぞれの地区の下部単位である組のなかで仲間を形成するものが多かった。組は当地方では一般に村カドウチと呼ばれ、冠婚葬祭の世話をするなど相互扶助を目的とする地縁的生活単位であった。一方、風呂の仲間は風呂屋カドウチ(単にモヤアということもある)といい、多くは村カドウチのなかの一部の家が集合して組織された¹⁾。したがって、結果的に風呂屋カドウチと村カドウチが一致する場合もあるが、前者は後者のなかのいくつかの家で構成される場合が多かった。

例えば皿山地区の場合、湧水の流れる堀端に風呂小屋が建てられ、その周囲に風呂屋カドウチの家が集まる(第3図)。村カドウチであっても、風呂小屋からの距離があるか内風呂(1軒風呂)の家は、風呂屋カドウチに属していない。ここでは、通俗的表現ではあるが、隣近所で風呂造りがもちあがり、自然発生的に形成されていったといわれている。

このことは、粉うちや味噌作りなどの相談が風呂のなかで決まり、これら生活の共同化を風呂屋カドウチで行ったという中津隈西地区古賀組での聞き取りと通じるものがある。いわば風呂屋カドウチは、近隣住民が家族的つきあいをする仲間であった。それゆえに、「この風呂は好かん人のおるけん、家方は



第3図 皿山地区の風呂屋カドウチ

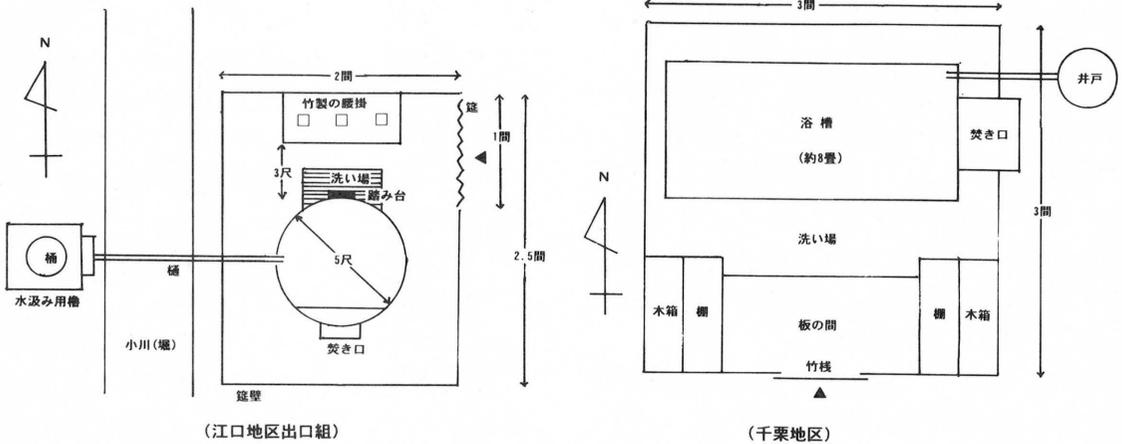
よその風呂に入ろう」といったこともあったという。風呂屋カドウチと村カドウチは別種の社会集団であったようである。

もっとも、このような状況は小規模な風呂屋カドウチに限られる可能性もある。風呂屋カドウチの規模はほとんどが10戸前後ではあるが、市原地区(80戸)、千栗地区(40戸)のように大規模なものもあり、そこでは村カドウチを越えて一つの共同風呂が造られた。

4. 共同風呂の諸相

1) 風呂小屋と費用負担

風呂小屋の大きさには大小があり、その形態も様々であった(第4図)。しかし、一般的には簡素な小屋が多かったようである。例えば江口地区出口組の風呂小屋は、約2間四方の藁葺き小屋で、周囲の風よけのために簾を張った粗末なものであった。小屋のなかには大人が6～7人一緒に入れるほどの大きな木風呂が据えられ、入口から右手には脱衣棚兼待ち合い椅子の竹編み棚が作られていた。夜は



第4図 共同風呂の見取り図

薄暗いランプの明かりが湯煙りで曇り、やっと人の顔が見えるぐらいであったという。しかし一方では、千栗地区のように3間四方程度の建物に湯船（約8畳敷でコンクリート製といわれている）が置いてあったところもみられる。このような相違は、地区の経済力の差もあるが、利用人数の多少の表れであった。

風呂小屋の土地は、共有地の場合もあるし、私有地の借地のところもあった。借地の地代に関しては、年貢などを収めていたという事実は確認できなかった。

風呂小屋の建設費と修繕費、電気あるいはランプ代、掃除道具などの費用は、戸数割か人数割であったといわれるが、資料を欠いているので集金方法や支出内容などは不詳である。後述のように、用水費は無料、燃料費は当番の負担であるから、毎日の入浴料徴収をしないのが普通であった。ただ、千栗地区で毎年2月20日に「風呂寄合」が開かれていたことなどからみて、定期的に寄り合いがもたれ、話し合いで経費の計算がなされていたものと思われる。

2) 用水・排水・燃料

風呂に必要な用水には、川水を用いる地区と井戸水の地区とがほぼ半ばした。付近に川や水路のある中津隈、江口、西尾上地、皿山

などの地区は川水、その他の地区は井戸水の利用であった。水路があっても、良質の水が得られるため井戸を利用した地区もあるが、西尾上地地区のように井戸水に鉄分が多く含まれ、止むなく川水を使っていたという例もみられる。

川水の利用は、井戸掘りの経費が削減される一方で、川からの水汲み作業が重労働であった。江口地区出口組では、風呂小屋西側の堀端（道瀬川の下流で分水して堀状になっている）に水汲み場があり、堀のなかに四本槽を組み、高さ約2メートルのところには18リットル入りの桶を置く足場を設け、跳ね釣瓶で桶に水を汲み上げていた。ここから浴槽までは約5メートルあるが、節を落とした大きい孟宗竹を樋にして送水した。樋の継ぎ目などからの漏水があって大きい浴槽に水を溜めるには骨折ったといわれ、殊に北風の強い雪の日や雨の日の水汲みの苦労は大変であった。しかし、このような設備のあるところは珍しく、多くは川水をバケツで汲み上げたので、その厳しい労働を想像することができよう。

井戸水の利用の場合も、手押しポンプが普及する以前は釣瓶を使って水を汲み上げたので、重労働であることにはかわりはない。

川水にせよ、井戸水にしても、水汲みは子供の仕事であるのが一般的だったようである。

このような子供のころの苦労話を懐かしく話す年寄りも少なくない。

入浴に使ったあとの排水は、浴槽の下部にある栓を抜けば自然に流れ出る仕組みになっており、そのまま川や水路に流すか「たまり」と呼ぶ小さなため池に流した。排水を肥料に用いることはなかったが、西尾上地地区では「たまり」を上地天神と呼び、そこにレンコンを植えていたという。

燃料としては、いずれの地区でも石炭が用いられ、薪や割り木、藁などは火起こしの時に使うのみであった。唯一の例外は皿山地区で、ここでは「白石焼」という焼き物が盛んであり、その燃料である薪が風呂沸かしにも利用されたのである。

昭和初期のころの燃料といえば、一般的に薪を用いるのが普通で、共同風呂の場合でも近隣地域の上峰町などでは主に薪が使われていた。それに対して、北茂安町で石炭を用いたのは、**町域に炭田がなかなかに注目される**。ここが平野部で薪の入手に困難が伴ったこと、したがって薪の使用は極力少なくし、費用負担からみて不経済ではあるが、火力の強い石炭を用いたことなどが背景にあったとされている。

石炭の調達には、中津隈地区の場合、各家で中原町の「イトヤマ」という燃料店へ荷車を引いて買いに行き、昭和初期には100斤が70銭～1円ぐらい、年間3回程度の買い出しで十分であったといわれる。他の地区でも、馬車や荷車で石炭の購入にでかけていた。

3) 風呂の当番

年中無休で行う風呂沸かしは、地区の仲間による当番制による場合が多かった。当番の仕組みは家族の人数により当番日数を決めるもの、話し合いで当番の期間を決めるもの、1週間交代で回すものがあった。このなかで最も多かったのは、家族人数により当番を振り分ける方式で、入浴者数の不公平をなくす

ため5人家族ならば5日間、7人家族であれば7日間連続して当番を勤める方式である。

他に、特異な例として千栗地区では専門の風呂立てさんを雇い、1人1回2～3銭ぐらいで入浴するという仕組みであった。

当番の仕事は、水汲み、湯沸かし、掃除である。当番は、時間は定められていないものの、夕日が落ちる前に石炭を持参して湯沸かしにかからねばならない。燃料の石炭は当番の負担であった。湯が沸くと拍子木を鳴らして風呂屋カドウチに知らせるが、それを聞いて人々が集まり始め、夏は9時ごろ、冬は7時ごろがピークになる。当番は常に風呂小屋に居て火加減や湯加減に注意し、全員が入り終わるの待つて湯を落とし、掃除をして帰る。これだけの仕事を農作業の合間に、しかも家族人数などによる日数分だけ沸かすとすると、大きな負担であった。

正月には朝から風呂を沸かし、朝風呂や昼風呂を楽しむ場合が多かったようである。また、中津隈西地区の古賀組では、年1回程度であるが、農繁期前に湯治がわりに塩風呂を沸かしたという。これらの湯沸かしもその時に回り順となった当番が行った。

当番とは関係がないが、入浴順にもふれておく。特にきまりはないものの自然と入浴の順番が決まっていたようで、風呂屋カドウチ毎に常に一番風呂の人があり、例えば白壁地区では地区の獣医が毎日最初に入浴したといわれる。次が老人と子供、その後が農作業を終えた男性、最後に食事の後始末を済ませた女性が入った。当番がいつ入浴するかの定めはない。混浴ではあったが、現実には男女が同時に風呂に入ることはなかった。入浴者は仲間内に限られ、来客があれば無料で入れたが、他地区の人々の入浴はなかった。もっとも、子供は隣の共同風呂に入りに行く場合もあった。

4) 共同風呂の功罪

北茂安町で共同風呂の経験者は、70歳を超える老人層に限られる。彼らのなかに共同風呂を懐かしく思う人々が多いのは事実で、それは共同風呂の利点が強く印象づけられているからにはほかならない。

共同風呂の最大の功績は、地域コミュニティの形成に関してであった。一つの湯槽に入り裸のつきあいをすることにより形成された人間関係は、人々の結束を深めたといわれている⁹。もとより入浴は私的行為であり、裸を見せることから少なくとも家族単位の行為である。したがって共同風呂は、家族的な行為の一部を地域の集団で行ったことになる。それゆえに、風呂という単一機能の集団とはいえ、家族とも類似した結び付きがあったと認識されていたのではないか。

風呂小屋は農作物の作柄や景気の動き、誕生・結婚・病気のこと、時には猥談まで含めて世間話の場所であり、情報交換の場であった。子供はそこで遊びを覚え、また多くを学んだのである。地域住民のコミュニケーションの円滑化と近隣の大人たちによる子供の教育¹⁰が共同風呂の大きな機能であった。

一方、欠点に関しては、プライバシーが保ちにくく、当番の仕事がつかったことがいわれる。しかし、戦前の村落社会では互いの顔見知りや普通の状態であり、当番にしても、毎日風呂に入れる利点からみれば苦勞ではなかったとの意見もある。もっとも、共同風呂でない地域から嫁いできた若嫁は困ったようで、現在でも当時のことを話したくないという人もみられる。

衛生面から問題があったことは否定できない。利用者数が多いだけでなく、湯槽内で体を擦るため湯の汚れがひどかったともいわれている。皮膚病、結膜炎、トラコーマなどは感染者がいれば瞬く間に広まったようで、そのために共同風呂を廃止したという地区もある。ただ、聞き取りの範囲では、警察などに

よる指導の事実の確認されていない。

混浴からくる男女間の問題は、それらしい話もないではないが、皆無といってよいとされている。疑似的ではあるが、家族ともいべき関係のなかでの入浴であることによるものであろう。もっとも、他の共同風呂への覗き行為はみられたようである。

5. 結びにかえて

本稿は、佐賀県北茂安町の共同風呂について事例研究としてまとめたものである。主として聞き取りによる事実を述べており、その意味では文字通り研究ノートの域を出ないかもしれない。しかしながら、ここでみた事柄は、北部九州の市町村史(誌)に記載された共同風呂の記述内容を深化させ、詳細にかつ具体的に示すものであった。したがって、この地方の共同風呂の実態を、一つの事例を通して明らかにし得たものと考えている。

しかも、その事実のなかには、規模の違いこそあれ、静岡県や愛知県、鳥取県などの共同風呂の状況と共通点がみられるものも少なくない。このことからいって、我が国の共同風呂は、地域の違いがあるにもかかわらず、庶民生活のなかに根ざした事象であった可能性が高いといえよう。とすれば、本稿は、共同風呂の役割と意義を考えるにあたって、事例の積み重ねの一翼を担ったものといつてもよいかもしれない。

もちろん、調査で得た事実関係の錯綜を十分に整理できていない箇所もあり、多くの調査漏れもあることを認めねばならない。とくに、共同風呂成立の契機、運営の経済的側面、村カドウチとの関係、その後の人間関係の変容などは残された大きな課題である。それらを補足して行く必要があるし、なによりも北部九州の共同風呂のなかにおける北茂安町の位置付けへの考察が求められよう。明らかにした事項よりも、今後明らかにせねばならないことのほうがはるかに多いのである。

注

- 1) 地域の最小の単位であるから、北茂安町では村カドウチに相当する。
- 2) 話者の最高齢者は92歳の赤司輝氏であった。
- 3) 福岡県南部の広川町、黒木町、山川町には、利用者の減少は著しいが、共同風呂が現存している(1998年現在)。
- 4) 西尾上地地区では血縁関係にある家が集合して**風呂屋カドウチを組織した**。
- 5) 江口地区には次ぎのような俚謡があった。

江口部落は西の端
近所つき合い16戸
男女合わせて80人
先祖代々もやい風呂
6人入りの桶風呂に
昨日とついだ嫁さんは
はずかしそうに遠慮して
ためらう姿がいじらしい
それでも風呂はもやい風呂
男女混浴あたりまえ
通りがかりのお巡りさんも
にんまり笑って知らぬ顔
楽しい楽しいもやい風呂
楽しい楽しいもやい風呂

(『北茂安町の史話伝説』による)

- 6) 浜崎幸夫教授(尚絅短期大学)は、親の躰であるマザーリングに対して他人による子供の躰や教育をアザーリングと名付け、共同風呂の重要な機能と位置づけている。

参考文献

小杉 達(1981): 浜名湖周辺の共同風呂. 静岡県民俗学会誌, 5. pp29-48

愛知大学博物館学芸員課程編(1996): 実習報告書, 1.

白石太良(1997a): 鳥取県中部における共同風呂.

流通科学大学論集人文自然編, 9-2. pp125-140

白石太良(1997b): 共同風呂(モヤイ風呂)と村落について—筑紫平野における事例を中心に—. 1997年度人文地理学会大会発表要旨

白石太良(1998): 市町村史(誌)にみる共同風呂の記述—福岡県と佐賀県—. 流通科学大学論集人文自然編, 10-2. pp145-157

太宰府市史編さん委員会編(1993): 『太宰府市史民俗資料編』. pp556-557

久留米市史編さん委員会編(1986): 『久留米市史第5巻』. pp23-24・p196

鳥栖市史編纂委員会編(1971): 鳥栖の民俗. 鳥栖市史研究, 4. p244

杷木町史編さん委員会編(1981): 『杷木町史』. p427

黒木町史編さん実務委員会編(1995): 『黒木町史』. pp1117-1118

久山町誌編纂委員会編(1996): 『久山町誌』. pp293-295

三田川町史編纂委員会編(1980): 『三田川の言語習俗 三田川町史付録』. pp56-57

上峰村史編さん委員会編(1979): 『上峰村史』. p912

北茂安町史話伝説編集委員会編(1983): 『北茂安町の史話伝説』. pp555-558

(のぐち ともひろ・流通科学大学学生)

(しらいし たろう・流通科学大学)